

常照

第807号

『火葬に念（おも）う』

年が明けたと思えば、日が経つのもアツという間で、昼の長さも長くなり、春の兆しを感じられる頃となりました。

去年の清水寺での世相を表す漢字は「密」でした。昨年からの疫病により世界各地で混乱が生じており、未だに収束の目途は立っておりません。一日でも

早く、安心して暮らせる日々を念じております。

その影響が火葬場にもあります。コロナに感染し、お亡くなりになられた方のご家族は、火葬に立ち会えない非常に辛い現状がありますし、コロナ以外で亡くなられた方のご家族でも、マスクや手の消毒をし、三密を避けながらの不慣れな火葬の立ち会いとなっております。

昨年末に、私の叔父が、浄土に往生されました。葬儀は自分が生まれ育った「お寺の本堂の阿弥陀さまの前で行って欲しい」との遺言から、十二月三十一日

に御本堂で葬儀を執り行いました。しかしながら、昨年「除夜会法要」は、新型コロナウイルス感染症予防の為、午前十一時からでしたので、私一人、火葬場に行くことができませんでした。最後に叔父のお骨を納めたかったのですが……。その分、若院達が、叔父のお骨を最後まで集め、丁寧に骨壺（箱）に納めてくれたようです。

特に長男は、多感な時期でもあり、親との会話も煙たがることもあります。でも、大切な叔父の死に接し、お骨を目の当たりにして、思うところがあつた

のでしよう。そこで改めて、叔父に感謝の気持を表すとともに「いのち」の尊さに触れたのではないかと思えます。

元来日本人は、お骨にたいして畏敬の念を抱いておりまして、だから人は火葬された後に、箸渡しで、丁寧に骨を頂きます。フォークやナイフ（切る・刺す）と違ってお箸は、丁寧につまみ、いのちを頂く大切な道具です。

その昔、家庭のお内仏（お仏壇）の前には、いくつも穴の開いた竹が置いてありました。そして、その穴にお箸がさしてありました。これは、食事の前に

は、必ずお内仏の阿弥陀さまに合掌をすることになり、そしてお箸をとり頂いておりました。

ですから私は、お箸も大事な「お仏具の一つ」と考えています。その大切なお仏具で最後は、皆で想いを一つに寄せて丁寧にお骨を納めます。

私個人としては「収骨」、「拾骨」という言葉に少し抵抗を感じております。確かに動作としては、お骨を収めたり、拾うことになるでしょうが、気持ちとしては、その方の人生の終焉にあたり、「生きてきた証」として残されたご縁のある方々が、

その方の想いや願いを、お骨と共に「頂く」ことになります。

尊い人生を歩まれてきた一日が、一つ一つのお骨であるからこそ、できるだけ、ご縁のある方々に（特に小さなお子様にとっては、「いのち」の深さを考える仏縁にもなると思いますが。）その姿を見て頂き、看取り、お骨を「頂いて」ほしいものです。



おろかなる

身こそ

なかなか

うれしけれ

彌陀の^{ナカイ}折言に

あふと思えば

良寛

四月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 四月七日(水)～十一日(日)

休 座

○後期 四月十三日(火)～十六日(金)

滋賀教区 長浜組 浄願寺

講師 夏木 一丸 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～

午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。
どうぞお誘い合わせ頂き、ご聴聞に来院ください。席の間隔を保ち、換気実施の上、お待ちしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号

本願寺小樽別院

電話 二二一〇七四四番
FAX 二九一四〇八〇番
テレホン法話 二七一六一六番